

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

共通テスト第2回である令和4年度の問題の種類と各解答数、配点の内訳を【表1】に示す。200点満点は令和3年度問題と変わらない。全体の解答数については、他の外国語試験の令和3年度問題の解答数等を参考に、2つ削減して50とした。

第1問は発音問題であるが、Dに関しては、ピンインによる出題をリスニング問題の代替とする観点に基づき、ピンインによる会話問題を出題している。第2問は、令和3年度問題と同様である。第3問は、令和3年度問題と同様の形式だが、試験全体の解答数を見直したことから、同じ形式の解答数が最も多かった第3問Aを4問から3問に削減した。第4問は、共通テスト第1回から特に充実させた形式で、コミュニケーション能力を読み取り測定する問題である。中間Aでは、会話・表・グラフから情報を読み取った上で適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の受信力を測定できる問題とした。中間Bでは、地図・会話から情報を読み取り、それらを総合して発信することを想定して、適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の発信力を測定できる問題とした。第5問は長文問題で、従来の大学入試センター試験では2題出題していたものを、共通テストでは1題に集約し、長文読解力全般を測る問題としている。

【表1】

問題の種類	発音・ピンイン	語句	表現理解力	コミュニケーション力	長文読解
問題番号	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問
解答数	9	8	10	12	11
配点	36点	32点	28点	52点	52点

第1問：発音の基礎及び正確さを確認する問題、正確なピンイン把握によるコミュニケーション力を確認する問題である。

音節の3つの要素（声母、韻母、声調）について問う出題及び正確なピンインの把握によるコミュニケーション力を問う出題となっている。中間AからDにわたって、日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮し、基本的な単語から出題した。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは、提示されている語が常用される単語になっていて適切であるとの評価を得た一方、更にバラエティに富んだ選択肢を用意すべきではないかとの意見もあった。

Dについては昨年と同様、会話文、選択肢をピンインで出題した。中国語表記の補助手段としてピンインによる表記法を用いることは、中国語の4技能をバランスよく習得するために必要な手段であり、日本の高等学校における中国語教育では極めて重要である。教科担当教員からは、易しい単語を用いた展開のある会話をピンインで出題する形式は、ピンイン学習を重視する出題であるとして、評価を受けている。

A：声母に関する知識を問うもので、**1**は“j”と“zh”の区別、**2**は有気音“k”と無気音“c”の区別を問うもので、正確な発音の習得と知識が求められる。

B：韻母に関する知識を問うもので、**3**は“-ing”と“-in”の区別、**4**は“-ei”と“-ui”の区別を問うた。

C：声調に関する知識を問う問題で、二音節語における声調の組合せを問うており、5つの二音節語、即ち10の音節に関して正確に把握していなければ正解は導けない。中国語を学ぶ初学者にとっては習得に苦勞するポイントであると同時に、相当中国語に習熟した者でも正確な知識をままたくことがある。

D：ピンインの会話文によるコミュニケーション力を問う問題で、会話の流れを理解して解答する必要がある。

第2問：語彙力・表現力を測る問題である。

Aは文の一部をブランクとし、適切な語を選ばせる問題で、単語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。併せて類義語の区別も問うた。教科担当教員からは、選択肢が重要語であり、適切な問題であるとの評価を受けた。

BはAと同様に、語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。適当でないものを選ばせることで難易度を上げている。教科担当教員からは、選択肢がいずれも重要語であると評価されている。

Cは、100～120字ほどの短文を読み、文脈に従って適切な語を選択させることによって、文脈に応じた語彙を選択する力を確認するものである。教科担当教員からは、基礎的な理解を見る適切な問題であるとの評価を受けた。

第3問：作文能力及びコミュニケーション力を測る問題である。

和文中訳及び中文和訳を通して、中国語の表現力、理解力を測る問題である。設問形式は昨年度と同じであるが、設問数を1問削減した。

A：日本語の文を読み、与えられた語句を正しく並べて対応する中国語の文を作る、和文中訳の設問である。8つの選択肢から必要な4つを選ぶ。教科担当教員からは、選択肢の語句はいずれも重要語の範囲で、語句の用法や文法の理解を確認する適切な問題であるとの評価を得た。

B：和文中訳問題で、選択肢の中国語はピンインで表記してあり、日本語の日常的な表現に対応する中国語の運用能力を測ろうとするものである。問1、2共に日本語の表現を的確に理解した上で、ピンインで示された中国語の選択肢の全てを、それぞれ最後まで読み解かなければ正解が導けないように工夫した。教科担当教員からは、問1は良問であると評価された一方、問2 **25** について、“会”の習慣を示す用法は研究もまだ少なく、一考を要するとの指摘があった。

C：中文和訳で、問題文の中国語はピンインで表記してある。選択肢の日本語文を最後まで読み解かなければ正解できないように工夫した点は、上記Bと同様である。教科担当教員からは、適切な設問であるとの評価を得た。

第4問：ホームステイやインターンシップなど、実際のコミュニケーションの場を具体的に設定

して、身近な話題に関する資料から、必要な情報を読み取り、複数の情報を比較・判断して要点をつかむ力を問う問題である。言語情報处理的観点から必要な内容を整理・統合して正しい解答を得るようにしている。中間Aでは情報を受信する場面における中国語運用能力、中間Bでは情報を発信する場面における中国語運用能力を問う。

現実の生活に即した素材からの出題であるため、従来出題には使われなかった語彙もこの第4問に限り取り入れている。ただし、受験者にとって難度が高い語彙は避け、正答を導くのに必要な情報は適切な語彙レベルを維持するよう配慮した。また、図表・グラフなどを使って情報をスムーズに伝える工夫をしており、ここでそれらを用いるのは、そのような現実の生活の面における中国語の運用能力を問うことを主眼とするためである。

Aは中国人がホームステイ先の日本人家族とともに水族館へ遊びに行くという設定になっている。水族館の案内図や紹介文、イベントの一覧表などから適切な情報を受信する能力を測る問題である。問1は、案内図と紹介文から、水族館の活動内容を的確につかみ、適当でないものを選ぶ問題である。問2は、会話文を読み取り、空欄を埋める問題である。問3は、冒頭の案内図と紹介文も踏まえて、イベントの一覧表をもとに、当日の行動の推移について空欄を埋める問題である。様々な情報を得て、それら进行处理し、適切な解答にたどり着く能力を測っている。教科担当教員からは、適切な問題との評価を得た。

Bは、大学生が旅行社へインターンシップに行き、ツアー旅行の企画書を作成する、という設定である。グラフ、会話文などから適切な情報を受信した上で、それらの情報に基づいて作成された企画書の内容を問う問題である。問1は、海外旅行の変化について中国語の文の中から、学生間で送られた電子メールの一部とグラフの内容に合致するものを選ぶという問題である。問2は、学生たちが提出したツアー旅行企画について、学生たちと課長が語り合う会話文に基づいて出題されている。(1)は会話文の空欄を補う問題である。(2)は下線部が指す内容について適当な日本語の文を選ぶ問題である。問3は、課長の意見を踏まえ、学生二人が最終的にまとめた企画書について、その内容に合致する中国語の文を選ばせる問題である。

教科担当委員からは、良問であるとの評価を受ける一方、36については選択肢をもう一つ増やすなどの対応が望ましかったとの意見が出された。

第5問：長文読解力を測ることを主たるねらいとしている。

今年度は評論文から選んだ。長文の分量は、長文問題としての適切な情報量に考慮して、昨年度共通テスト(2)の800字強から900字強に増やした。問題文は、使用語句、表現などにも留意しながら、共通テストにふさわしい内容に書き換えている。素材や書き換えなどについても、教科担当教員から毎年提出されている要望を反映するよう努めている。

問題文は、読書についての著者の考えをウォーキングと対比させながら論じたものである。現代社会における読書の役割を、人の精神に対する働きなどの視点から論じている。問1は、文中の下線部の解釈を中国語の選択肢から選ぶ問題であり、問4は、文中の下線部の解釈を日本語の選択肢から選ぶ問題である。問2は、中国語のフレーズが入る位置を選ばせるものである。問3、問6、問9は、文中の空欄に入れるのに適当な中国語の語句を選ぶものである。問5は指示代名詞が指す内容を日本語の選択肢から選ぶ問題である。問7は、空欄に入れるのに適当な中国語の語句の組合せを選ぶものである。問8は、文中の空欄に入れるのに適当でない中国語の語句を選ぶものである。問10は、従来どおり、問題文全体の内容に合致する選択肢を選ぶ問題であった。

教科担当教員からは、抽象的すぎず適切な問題であるとの評価を得た。

3 まとめと今後の課題

中国語は他の外国語と比べ平均点が高い傾向にあるが、中国語の受験者層の特性を考慮すれば、いたずらに平均点にまどわされることなく、高校の学習で到達した学力を正しく評価できる試験であるべきと思われる。教科担当教員からも、高校からの学習者が対応できるような出題を強く要望されている。本分科会の問題作成の方向性が平均点によって揺らぐことは、学習者にとって望ましくないと思われる。

平成19年度以降の16年間の受験者数及び平均点の変化は【図1】となる。本試験受験者は599人、追・再試験受験者は6人であり、合計605人であった。これは、昨年の639人から34人の減少となった。受験者数は、この3年間で667人、639人、605人と若干減少してきているが、共通テスト受験者数の推移を考えれば、ほぼ横ばいと言え、高校において中国語教育が着実に定着しつつあることの証左と見ることができよう。来年度以降も、共通テストの目的に則して、基礎的な学力を身に付けた受験者が報われるような問題作成を心がけていきたい。

共通テスト2回目の結果として見た場合、シンプルな情報摂取、情報把握を問うだけにとどまらず、語学の本来の意義である読解力を問い続ける必要性がうかがわれる。

今年度も教科担当教員の方々をはじめ各方面から有益な意見を頂いたことに、深く感謝したい。こうした意見を参考にしながら、「高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる問題」の作成を通じて中国語教育の発展と充実に寄与していく所存である。

【図1】

